

男子進学校生徒の家庭科観

男子進学校卒業生へのインタビューデータの分析を通して

Attitudes of students at top ranking boys' schools toward Home Economics Education:
Analyzing data from interviews conducted among graduates of top ranking boys' schools

大 矢 英 世*
Hideyo OYA

男子進学校生徒の家庭科観

男子進学校卒業生へのインタビューデータの分析を通して

Attitudes of students at top ranking boys' schools toward Home Economics Education:
Analyzing data from interviews conducted among graduates of top ranking boys' schools

大 矢 英 世*

Hideyo OYA

Abstract This study aims at clarifying students' attitudes toward Home Economics Education at top ranking boys' schools.

Semi-structured interviews were conducted and the data was analyzed based on the KJ-method.

The results reveal the following: They tend to regard Home Economics Education as a subject for acquiring cooking and sewing skills, and are therefore unlikely to feel the importance of studying Home Economics Education at high school.

Furthermore, they feel that high school teachers also make light of Home Economics Education. However, they tend to evaluate the subject highly in the sense that enables them to actively studying various social life-problems.

Key words: KJ-method KJ法, graduates of boys' top ranking boys' schools 男子進学校の卒業生, attitudes toward Home Economics Education 家庭科に対する考え(家庭科観), semi-structured interviews 半構造化面接

I. 問題の所在と研究の目的

1994年度から高校家庭科も男女必履修となり、家庭科は小学校から高校まで男女共に学ぶ教科となつて久しい。しかし、2006年に家庭科の未履修問題が浮上したように、すべての学校で家庭科の授業が規定通りに実施されたわけではなかった。

筆者は、講師として男子進学校の家庭科に携わり、家庭科が男子進学校では、他教科と同じ土壌になかなか上がれない現実をみてきた。一方、いのちや暮らしにかかわる課題を生活者の視点から考える家庭科の学びは男子進学校の生徒にこそ必須であるという思いを強めている。

大矢ら(2014)は、男子進学校の家庭科教員へのインタビュー調査分析から、男子進学校家庭科教員が、学校の実態に合わせた教材や授業スタイルを工夫していくことで家庭科に対する「生徒の学ぶ意識の向上」が見られ、この生徒の姿勢の変化が、他教科教員の理解と協力を生み、家庭科の教育環境の充実につながっていくという定着へと向かう流れの構図を析出した。このように、家庭科の充実のためには、生徒の意識の向上が欠かせない。また、男子進学校の家庭科の授業内容を充実させていくためには、学ぶ側のモチベーションを高められる教材を準備することが大切である。

そこで本研究では、男子進学校の生徒が家庭科をどのように捉え、どのようなことを望んでいるのかを明らかにすることを目的とした。

* 人間生活学研究所 生活環境学専攻
Graduate School of Human Life Science, Division of
Living Environment

II. 研究の方法

1. 調査対象者

調査対象者の特性を Table 1 に示す。調査対象者は、男子進学校の卒業生 5 名である。ここでの男子進学校とは、ほぼ全員が大学進学を希望し、難易度の高い大学に進学している男子校とした。いずれも家庭科が男女必修教科となった 1994 年度以降に高校に入学している。

現役の生徒ではなく、卒業生への調査としたのは高校段階までの家庭科の履修をすべて終わらせており、少し距離をおいて、学校教育全体の中の家庭科について冷静に判断できると考えたためである。調査対象者は全員、小学校は男女共修で家庭科の授業を受けている。

対象者 S と対象者 T は、同じ男子進学校の卒業生だが、時期が異なるため中学校の家庭科の授業の有無で違いがみられる。対象者 U と対象者 V は同じ男子進学校の卒業だが、履修年度が違っている。対象者 W は、中高ともに家庭科の授業は実施されるレポート課題のみであった。Table 1 の実習室の有無は、それぞれの対象者が在学中の状況を示している。

2. データ収集

男子進学校卒業生 5 名への調査は、2010 年 6 月から 2011 年 10 月にかけて行った。主な質問項目は、育った家庭環境、家庭科の学習内容、男子進学校の家庭科の状況、家庭科への意見等である。

調査の実施にあたり、調査協力者の同意を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成し、分析データとした。

3. 分析方法の選択

上記 5 名のインタビューデータの分析には、川喜田二郎考案した KJ 法を用いた。

KJ 法は、多数の質的データを比較しながら状況や関係性を明らかにする方法として優れており、本研究の分析に最適であると判断した。

なお分析の信憑性・妥当性を高めるために、KJ 法認定「株式会社エバーフィールド」において 2010 年 9 月に集中研修を受講し、その後、KJ 法本部・川喜田研究所認定永野篤インストラクターから、本研究における手順および元ラベルや表札の妥当性について個人指導を受けた。

Table 1 Characteristic of the interview participants

	年齢	調査時の属性	面接時期	家庭科の授業の有無			出身男子校	実習室
				小学校	中学校	高校		
S	19 歳	大学生	2011.07	○	○	○	A 校	○
T	29 歳	英語科教員	2010.06	○	×	○	A 校	×
U	25 歳	数学科教員	2011.07	○	×	○	E 校	×
V	21 歳	大学生	2011.10	○	×	○	E 校	×
W	22 歳	大学生	2010.06	○	×	○	Z 校	×

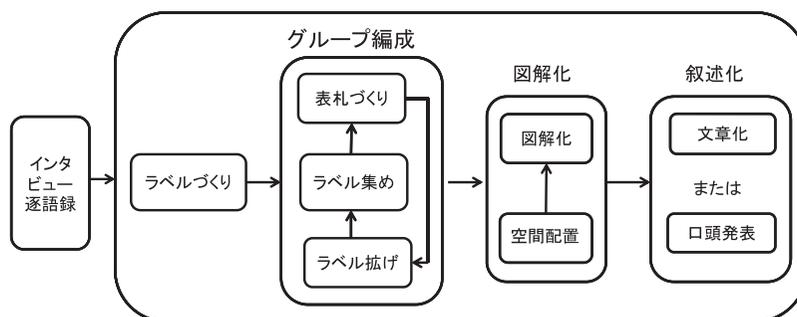


Fig. 1 Procedures in the KJ method

4. 1997年版 KJ 法の分析手順

KJ 法は、Fig. 1 に示したように、ラベルづくり→グループ編成→図解化→叙述化の 4 ステップから成る。

(1) ラベルづくり (元ラベル)

インタビュー逐語録を 1 つの意味のまとまりにより細分化し、調査対象者の家庭科観に関するデータのエッセンスを書き出し、元ラベルをつくる。

(2) グループ編成

(1) で作成した「元ラベル」をひろげ、概念が近いラベル同士を合わせてグループを作る。さらに、このグループ同士を比べて類似性の高いものはまとめて 1 つのグループとし、グループの表札をつけ、その元ラベルは表札の下に重ね、クリップでとめる。

さらにその表札をつけたラベルの束を並べて、ラベル広げ→ラベル集め→表札づくりを繰り返して、ラベルの束が 3 枚程度になるまで統合する。

(3) 図解化

最終的につけられた表札に重ねられた束の関連性を考えながら段階ごとにセットしていったラベルが分かるように空間配置し、線で囲み島どりする。さらに島同士の関係性を示す関係記号 (Fig. 2) を記入する。

また、それぞれの島を視覚的に感性や直観的理解

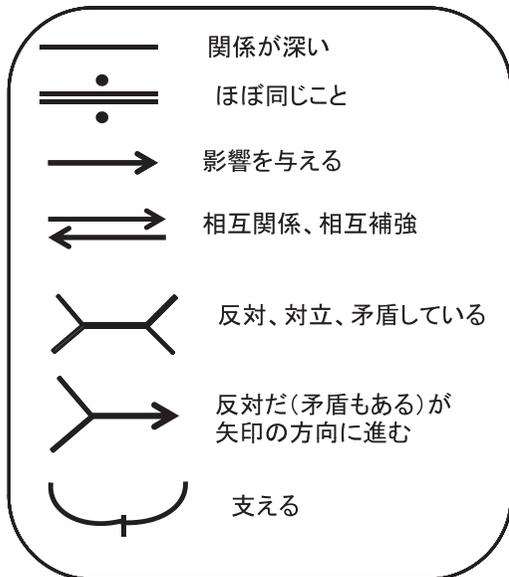


Fig. 2 Signals which stand for relationships in the KJ method

に訴えるような単語、記号、絵などで表すシンボルマークを入れる。

(4) 叙述化

図解化により判ったことを文章にまとめる。

5. 個人の統合から全体の統合へ

本研究では、まず調査対象者 5 名について、対象者ごとに上記手順で統合を行った。その後、対象者ごとに抽出された最終段階の表札を元ラベルとし、(1)～(4) の手順で同様に KJ 法により統合し、調査対象者全体の家庭科観の要素を析出した。なお、この際の元ラベルは、調査対象者 S から W 一人ずつに実施した統合の元をたどれるように、それぞれの調査対象者のアルファベットを入れてから通し番号を付けた。

Ⅲ. 統合による結果と考察

調査対象者 5 名の最上位の表札はそれぞれ 3 枚の計 15 枚になった (Fig. 3)。この 15 枚を元ラベルとして KJ 法で統合した結果、Fig. 4 に示すとおり 3 つの表札に統合された。

「男子進学校卒業生の家庭科への思い」の要素は、

【A. 家事の知識は、今は使わない】

【B. 進学校は、私生活的の学びより社会で活躍するための学びを重視している】

【C. 主体的にアクティブに学びたい】

であった。図解化の最後にシンボルマークを入れ、Fig. 5 のように男子進学校卒業生の家庭科への思いが描き出された。

なお、最上位の表札を太字で表し【】で括った。元ラベルや元ラベルからの抜粋は□、下位の表札は『』で括り、記述した。

以下、調査対象者全体の家庭科への思いの各要素についてみていく。叙述の都合上、元ラベルや表札の文末表現等を一部変更している場合がある。

1. 男子進学校卒業生の家庭科への考えの要素

(1) [家事の知識は、今は使わない]

調査対象者 S から W の家庭科への考えの要素の 1 つは、Fig. 4 が示すように【A. 家事の知識は、今は使わない】であった。シンボルマークは不要とした。ここで言う“今”は、在校中という意味である。

S-1.家事学は学校でなく、家で学べば良い。	T-4. 家事学のイメージでは、家庭科は軽視され続ける。	U-7. 我々は社会のリーダーになることが前提の環境の中にいる	V-10. 学校では“本当の暮らしの学び”がどうでもいいことになっている。	W-13. 家事は学ばなくてもそれなりにこなせるものだ。
S-2. “型”苦しいのはごめんだ。	T-5. 家庭科といえば、家事学だ	U-8. 体験したり自分で探求したことが、記憶に残っている。	V-11. 家庭科は生徒一人ひとりが主体であることを意識させる教科だ。	W-14. 家庭科は学校でやらなくてもいいものだと感じている。
S-3. “現実”問題の学びは良かった。	T-6. 自分たちと異なる世界を知った。	U-9. 実技は授業でやっただけなので、身につかなかった。	V-12. 家事はやっぱり女になりがち	W-15. 進学校には固有の「エリート養成」カリキュラムがある。

Fig. 3 Final label of all subjects

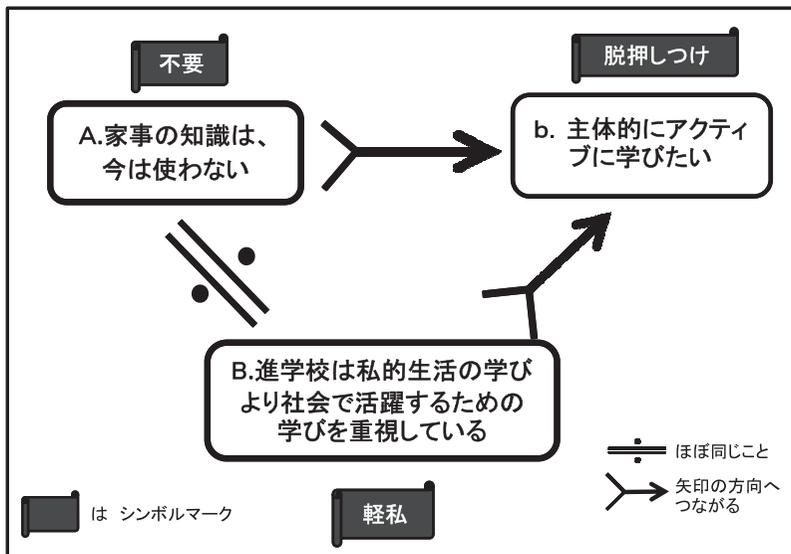


Fig. 4 Elements of attitudes toward Home Economics Education among graduates of boys' top ranking boys' schools

彼らは、『T-5. 家庭科といえば、家事学だ』というイメージを持っていた。しかし中高時代の日常生活で家事に携わることはほとんどないのが現状で、『U-9 実技は授業でやっただけなので身につかなかった』のである。このような状況からも、『家事学のイメージでは、家庭科は軽視され続ける』ことは自明のことといえよう。しかし、ここに矛盾がある。[オ. どうせやるなら、僕らが家庭科実行できることにしてほしい]と、家庭科という教科に対し

ては、[c. 実際に使える内容であることへの期待が大きい]のである。

一方で、『W-13. 家事は学ばなくてもそれなりにこなせるものだ』し、『S-1. 家事学は学校でなく、家で学べば良い』とも言っている。[ア. “家のこと”は、生活の中で実践している]と考えている。そこで『W-14. 家庭科は学校でやらなくてもいいものだと感じている』のである。学びたい気持ちはあるが、受験勉強優先と言える。

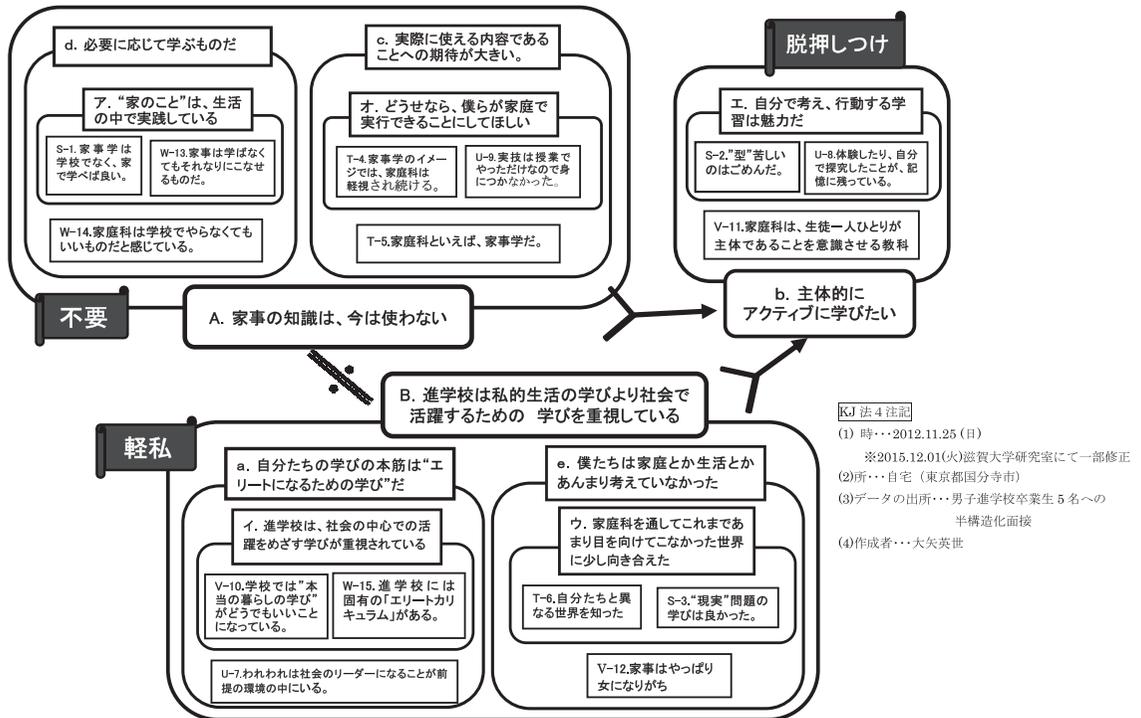


Fig. 5 Attitudes toward Home Economics Education among graduates of boys' top ranking boys' schools

(2) 【進学校は私的生活の学びより社会で活躍するための学びを優先している】

2つ目の要素は、【進学校は私的生活の学びより、社会で活躍するための学びを重視している】であり、シンボルマークを軽私とした。

『W-15. 進学校には固有の「エリート養成カリキュラム」があり』、卒業してから振り返ってみると『V-10. 学校では“本当の暮らしの学び”がどうでもいいことになっている』現状がみえてくる。しかし、『U-7. 社会のリーダーになることが前提の環境の中にいる』ことを自覚して、[a. 自分たちの本筋は、“エリートになるための学び”だ]と彼ら自身も納得していた。

一方、[e. 僕たちは過程とか生活とかあんまり考えていなかった]と振り返る。『V-12. 家事はやっばり女になりがち』というジェンダーもその根底にある。しかし、『ウ. 家庭科を通してこれまであまり目を向けてこなかった世界に少し向き合えた』のである。家庭科では、人の私生活に視点をおきなが

らも、その背景となる世界まで見ていくことに気づき、『T-6. 自分たちと異なる世界を知った』し、そのような『S-6. “現実”問題の学びは良かった』と感じていた。

(3) 【主体的にアクティブに学びたい】

3つ目の要素は、【b. 主体的にアクティブに学びたい】であり、シンボルマークを脱押しつけとした。

彼らは、他の受験教科と家庭科の差別化を図っている。家庭科までもが『S-2. “型”苦しいのはごめんだ』と考えていた。すなわち知識の詰め込みではなく、自分で考える家庭科を求めているともいえる。

さらに『U-8. 体験したり自分で探求したことが、記憶に残っている』のであり、[工. 家庭科では、自分で考え、行動することが大切である]と指摘している。このように、家庭科を学ぶことを通して『V-11. 家庭科は、生徒一人一人が主体であることを意識させる教科』だという気づきも生み出していた。

2. 各要素間の関係性

男子進学校に通う生徒にとって、【A. 家事の知識は、今は使わない】というのは、平均的に言えることであろう。これは、【B. 進学校は私的生活の学びより社会で活躍するための学びを重視している】ことと、ほぼ同じような意味にとれる。しかし、家庭科の学びに触れて【b. 主体的にアクティブに学びたい】とも考えている。家庭科では知識の押し付けではなく、自分で考え、自分で判断し、行動することに意義を見出しているのである。日常生活で、【A. 家事の知識は、今は使わない】の思いとは矛盾も孕んでいるが、主体的にアクティブに学びたいという思いにつながっていくとも言える。

また、【B. 私的生活の学びより社会で活躍するための学びを重視して】いる受験教科と異なり、家庭科では【b. 主体的にアクティブに学びたい】という思いにつながっている。したがってそれぞれの表札の関係性を Fig. 4 のように表現した。

3. 調査対象者5名の統合による男子進学校卒業生の家庭科への考え

調査対象者SからWの5人の家庭科への考えについてKJ法を用いて分析した結果、Fig. 5のよう構図が描かれ、以下のことが明らかとなった。

彼らは、【家事の知識は、今は使わない】ので、家庭科は必要ないと考えていた。また【進学校は、私生活的の学びより社会で活躍するための学びを重視している】ため、学校からも家庭科は軽視されていると感じていた。しかし、イメージしていた家事学とは異なる家庭科の授業に触れ、【主体的にアクティブに学びたい】という意識が生まれ、自分で考え、自分で探究していく家庭科の学びに対して支持する姿勢も見られた。

IV. まとめ

男子進学校の生徒が家庭科をどのように捉えているのか、男子進学校の卒業生に半構造化面接を行い、そのインタビューデータをKJ法により分析した。その結果から以下のことが明らかとなった。

①本調査の対象者は、中高時代にはほとんど家事に参加しておらず、日々の生活での家事体験が極め

て少なかった。そのうえ家庭科を「家事・裁縫」教科としてイメージしているため、中高生の段階で家庭科を学ぶことにそれほど価値を見出すことができていなかった。

②進学校の受験に特化した独自のカリキュラムを当然のことと受けとめていたが、家庭科では、受験教科とは異なり自由な発想で、主体的にアクティブに学ぶことができる教科としての支持も見られた。

③彼らは、家庭科の授業を受けて「家事・裁縫」だけでないことがわかり、特に生活と社会とのつながりに視点を向けた参加型学習に対しては前向きであった。ここに彼らの関心を引き出す家庭科の魅力があり、生徒の現状に合わせて教材を組み替えたり、課題へのアプローチの仕方を工夫したりできる家庭科の利点があると考ええる。

④男子進学校では、実習室が整っていないことや、家庭科の授業時間が極端に少ない等の学校事情も絡んで、本来授業の中で実施されるべき調理実習もきちんとできていないことが多い。彼らは「家事の知識は、今は使わない」と言いながらも、調理実習等の活動型授業に関心を示し、期待もしているため、実習が行われない家庭科では生徒の満足度は低くなりがちであった。実習質や正規の授業時間数の確保等により、実習面での充実を図ることも必要である。理論と実践のバランスがとれてこそ、初めて男子進学校の家庭科が学校の教育課程の中にしっかりと根付いていくと考ええる。

本研究の限界として、男子進学校の卒業生5名を対象とした限定的な調査となっていることがあげられる。また、男子進学校の家庭科の状況も年々変化している。実習室が整備されたり、家庭科の授業枠が年間を通して確保されるようになったりと、男子進学校の家庭科の状況は学校により差があり、多様化している。

家庭科が男子の必修修教科となって20年以上が経過した。男子進学校における家庭科について、調査対象を増やすとともに、今後も継続した検討が必要である。

〔要約〕

本研究は、男子進学校の生徒の家庭科に対する考えを明らかにすることを目的としている。男子進学

校の卒業生の家庭科に対する考えについて半構造化面接を実施し、KJ法を用いて分析した。分析の結果、彼らは、家庭科は、料理・裁縫を学ぶ教科というイメージを持っており、高校生は家事をしないため、高校で家庭科を学ぶ必要がないと考えていた。また、彼らは、学校も家庭科を軽視していると感じていた。しかし、その一方で、受験勉強と違って、生活の現実問題について主体的に活動的に探求していく家庭科の学びについては、評価が高かった。

謝 辞

インタビュー調査にご協力いただいた男子進学校の卒業生の方々に深く感謝申し上げます。

なお、本研究は修士論文の一部を加筆修正したものである。

引用・参考文献

- 1) 大矢英世・大竹美登利・天野晴子：男子進学校における家庭科の定着過程—家庭科教員へのインタビューデータの分析を通して—、日本家庭科教育学会誌 第57巻第3号, 163-172, (2014)
- 2) 田中博晃, KJ法入門 質的データ分析法としてKJ法を行う前に、よりよい外国語研究のための方法, 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部 メソドロジー研究部会 2010年度報告論集, 17-29, (2010)
- 3) 川喜田二郎：KJ法入門コーステキスト4.0 KJ法本部川喜田研究所 (2007)